

「思い出のキャンパス」

高崎経済大学経済学部教授 ◎ 加藤 一郎

大学に入学したのは1966年4月。1年浪人して19歳で入学した。今から40年以上前のこと。もしかしたら、皆さんだけではなく、皆さんの両親も生まれていなかったかもしれない。小学校に入学する6歳にも心がつくとする、48歳以上の両親がいれば、そのころのことを覚えているだろう。そんな昔に大学生活を過ごした。

大学の進学率が高くなりだし、受験勉強が過熱してきたころだ。受験勉強はした。受験科目は国語、数学、英語、社会と理科は2科目の7科目。知識を詰め込むだけ詰め込んだ。入学してからはあまり勉強しなかった。同じ敷地にあった社会・人文系の学部の中で、法学部には司法試験を受ける人も多く、教育学部は先生になる、文学部は文学や歴史が好きという人が多かった。

経済学部はサラリーマンになる人が多かった。中に経済学が好きな人や、経済学を学んで将来に役立てたいと思っている人もいただろう。しかし、そうでない人も多かったのではないと思う。だから、勉強をサボってあせることは時々あったが、そんなに深刻にならずに過ごした。

勉強に熱中しなかったのには別の理由もある。そのころは大学紛争の時代であった。いま振り返ってみると、ワンマン経営や医学部をはじめ大学に残っていた古い体質が、大学の大量化、民主主義の定着の中で一挙に爆発、それに関係のないうつぶんや、面白半分のノリがかさなって、大学紛争が起こったのだろう。だから、ある人には大変深刻な影響を与え、そうでない人、反発を持つ人もいる。少なくとも、皆がみな真剣に大学問題に取り組んだとは思えないし、逆にふざけていた人ばかりだとも思わない。紛争が直接及んできた頃は3年生になっていた。教養(1・2年

生対象)のキャンパスはバリケード封鎖された。いよいよとなって機動隊がバリケードの解除に入り、催涙ガスが使われた。催涙ガスは翌日まで残り、そこを通ると目が痛かった。

怠け癖がついていた上に、騒然とした雰囲気巻き込まれて単位をほとんど取れなかった。4年生になった。当時は売手市場で5月の連休明けには多くの人の就職先が決まっていた。

就職活動をほとんどしなかったこともあり、経済学をすれば何かできるのではないかと思うようになって、大学院に行くことにした。大学院の試験は夏休み明け。これといった勉強をしてこなかったため、本当によく受験勉強をした。

大学院に合格して、卒業しないとだめなので、卒業単位を取るために必死に勉強をした。周りの人にも色々助けてもらって、卒業単位を取った。必死に勉強しているときの思い出で今でも覚えているのは、下宿に同じゼミの友達がきたので何かと聞くと、試験の事を教えてくれという。その友人のほう単位は取れているのにと思いつつ、教えたことだ。

大学院に入った夏に結婚した。そして大学院の2年生のとき、修士論文を書いた。その時の夏休み、極端に言う朝から晩まで英語の本を読んだ。夜、寝ると、頭の中をアルファベットがグルグル回転する。

学部の4年間、大学院の5年間、そして日本学術振興会奨励研究員として1年間、「思い出のキャンパス」に10年間いた。何代か前の首相の言葉ではないが、人生色々、人それぞれだし、後悔はしていないが、大学は4年間で卒業するのがいいような気がする。…あとは、自己決定、自己責任で…

